

実践系学知としての地域研究

京都大学地域研究統合情報センター 山本博之

2010年11月5日、上智大学で地域研究方法論シンポジウム「実践系学知としての地域研究」が行われた。「地域社会にとっての文理融合」、「事例研究を越えて：ヨーロッパ地域研究の今日的課題」、「災害対応の地域研究：研究者にとっての人道支援とは何か」の3つの報告に続き、井上真氏（東京大学）と酒井啓子氏（東京外国語大学）からのコメントを受けて、フロアを交えた討論が行われた。論点は多岐にわたったが、ここでは紙幅の都合から2つだけ紹介したい。

1つは、地域研究の方法をどのように身につけるか（教員の立場からすれば、どのように学生を指導するか）をめぐる議論である。地域研究では、地道にデータを集めるだけではなく、その上で対象地域を総合的に捉えるセンスが求められる。しかし、研究者としての修業期間中に地域研究のセンスばかり追い求めていけば、研究業績が増えないどころか研究の方法も身につかないことになりかねない。そのため、まずは特定のディシプリンに身を置いて修業を重ね、研究職に就いてから地域研究のセンスを存分に開花させればよいという考え方があり得る。これに対し、地域研究のセンスは修業段階のうちから磨かなければ十分に身につかないという考え方もある。

これに対しては賛否両論があるが、ここではやや別の角度からの意見を2つ紹介する。(1) 最近では、大学卒業後に官公庁や民間企業や市民団体などで勤務してから大学院で地域研究を学ぶ人が増えており、研究者になる修業の場としての位置付けを考え直す必要がある。(2) 大学教員になるには地域研究は不利だという認識が一部にあるようだが、それは米国の事情をもとにした理解であり、日本の大学では学際的な学部や研究科が多く新設されているため、大学教員としての就職の有利不利を言うのであれば今後はむしろ学際的な地域研究者としての業績を挙げている方が有利だと言えるかもしれない。

2つめは、地域研究者は「よりよい」社会のあり方を決めることができるのかという議論である。この議論は、普遍主義を掲げた他地域への介入を肯定するのか、それとも地域社会の固有性を尊重すべきなのかという議論とも重なる部分がある。シンポジウムでは、今日の世界では地域や共同体の内部と外部を明確に分けられない状態が多く見られ、そのような内外が混然とした状況で共通の理解をどのように作ることができるかという観点から、地域研究者の役割が議論された。

紛争や災害の対応の現場では、地域の内外からさまざまなアクターが訪れ、それぞれの立場を抱えて支援なり復興なりに関与する。そこでは誰が内部者で誰が外部者かを明確に分けることが意味を持たない状況が生じており、そのような状況では、さまざまな立場の人々がそれぞれに納得する「物語」を提示し、共有するしかない。外部から規範的な「物語」を持ち込む方法は有効ではなく、関係するいろいろな立場の人々の考えを聞いてまわりながら共通の「物語」を作っていくしかないが、そのためには地域研究者の仕事が媒介役になりうる。地域研究者は最初から特定の価値に基づいて「物語」を作るのではなく、さまざまな立場の人々の話を聞きながら「物語」を作り上げていくためだ。「物語」を作り上げていく上で何らかの方向性は必要になるが、その妥当性はその研究者の良心によるとしか言いようがない。紛争や災害の対応の現場では、そのようにして得られた「物語」をもとに、それぞれの立場の人々がそれぞれの専門性に基づいて行動するのであり、その行動の内容や結果は地域研究者ではなく行動した人々が責任を負うべきである。

このほかに、地域研究者が政策立案に関わることへの是非など、多くのことが議論された。ここで紹介されなかった議論については、地域研究方法論研究会ウェブサイト (<http://areastudies.jp/>) をご覧いただきたい。